

タイトル	日本におけるNeue Sachlichkeitの運命
著者	千葉, 宣一
引用	北海学園大学人文論集, 23・24: A63-A77
発行日	2003-03-31

# 日本における Neue Sachlichkeit の運命

千葉 宣一

## (1) Neue Sachlichkeit の受容と、訳語「新即物主義」の確立を巡って

ノイエ・ザハリヒカイトは、第一次大戦後に表現主義の限界突破を志向し、ヒットラーが政権を獲得し、ナチスのゲルマン民族至上主義の文学が登場するまで、一九二四年から三〇年代にかけて、ドイツの文壇を支配した従来の意味における「ism」ではない文藝思潮である。新しき客観性<sup>客観性</sup>や新即物性<sup>新即物性</sup>、新現実主義<sup>新現実主義</sup>、新事象主義<sup>新事象主義</sup>などの訳語で呼ばれていた「Neue Sachlichkeit」を、「新即物主義」と訳したのは、茅野蕭々の、「最近獨文学における新即物主義」(一)(二)(三)、「朝日新聞」——昭和四年七月十五日・火曜日、——十七日・木曜日)が最初である。

次いで成瀬無極が、『改造』の昭和五年一月号の特輯、「一九三〇年」で、「新即物主義」を紹介。へ——中略——クライストの場合のやうに「叙述」ではなく「報告」だ。告訴、弾劾、感傷、興奮、に代る事実、行動、リズム、テンポだ。家庭から社会へ、個人から人類へ、心理から思潮へ、概念から歴史へ、と、ルマ<sup>ルマ</sup>ルクの「西部戦線異状なし」にも言及している。

皮肉なことに茅野自身は、その後、「新即物性文学と日本文学」(『中央公論』第五百十三号・昭和五年九月)において、ヘディ・ノイエ・ザハリツヒカイトを「新即物主義」と譯してみたが、主義といふ語が此の場合少し堅すぎて少々伸縮性弾力性に乏しすぎる——として、という理由で撤回しているのである。そして、昭和十一年十二月刊行の『世界文藝大辞典』(中央公論社)第四卷あたりから、「新即物主義 独 Neue Sachlichkeit (1)

新即物主義の文学(上村清延) (二)新即物主義の音楽(山根銀  
二)(三)新即物主義の美術(村山知義)」の訳語は定着したの  
である。

(11) IM WESTEH NICHTS NEUES GEBOR

「西部戦線異状なし」は、ドイツで一九二九年四月に発刊され、  
三カ月で五十万部が売り尽くされた。国際的にも二十五カ国語  
に翻訳され、三百五十万部が出版されたという。事実、日本で  
も、エリヒ・マリア・レルマルク(ERICH MARIA REMARQUE)  
著の秦豊吉の翻訳は、昭和四年十月に発行されるや、瞬く間に  
超ベストセラーになり、十二月には百十版を重ね、中央公論社  
の経営危機を見事に再建したのである。

同年十一月、秦豊吉の訳本をテキストに、「劇団築地小劇場」  
(村山知義脚色。北村喜八・村山共同演出・於本郷座)と、「新  
築地劇団」(高田保脚色・演出 於帝国劇場)が競演された。

さらに、翌年三月には、「左翼劇場」と「新築地劇場」が競演  
し、驚くべきことには、昭和四年十二月三十日、文藝童話會が、  
文藝童話『西部戦線異状なし』(日吉堂本店)を刊行するなど、  
社会的センセーションを巻き起こしたことである。だが、秦豊

吉等は、ノイエ・ザハリヒカイトの代表的作品であることは、  
この時点では認識していなかった。

レルマルクに就いての最初の情報は、八百清顕が、昭和四年十  
一月、『独逸文学研究』(第二輯 第一書房)に発表した「独逸  
最近文壇消息」と推定される。氏は、M・シュトースが『Die Tot-  
誌に寄稿した、「レルマルクの悲劇」から、次のような一節を訳出  
している。

↑彼は戦争小説を魂を以て書いた。事実には忠実に、  
ジャーナリスティックな文体で。真剣に、併し、何が大衆に訴  
へるかを知っているあの文芸欄的天分を以て。正直に、併し、  
彼が最後の重点をその原稿の最後の頁に置く程、大いに緩和  
して——即ち、有り難い仕合せには、この重荷が描き尽され  
ると、人生は美しく面白く、世界は広く、人は自動車に打ち  
乗って南方に疾駆すればいいのだ……。この小説が、『Yosis-  
che Zeitung』に現れるそれが異常な効果と結付く。種々な重  
要論文がレルマルクに関して書かれる。商略的に戦争時代の問  
題が提出される。小説が印刷される。諸名士の名前が本の前  
に宣伝的に並べられる。至る処にポスターが貼られる——と。

『西部戦線異状なし』の方法的特質は、単純化すれば、作者が扉に特記している、

「この書は訴へでもなければ、告白でもない積りだ。唯砲弾は逃れたが、戦争によって破壊された、ある時代の報告の試みに過ぎない筈である」

との主張に見いだされる。原文を左記に掲示しておく。

Dieses Buch soll weder eine Anklage

noch ein Bekenntnis sein.

Es soll nur den Versuch macen,

übee eine Generation zu berichten,

die vom Kriege zerstört wurde—

auch wenn sie Granaten entkamm,

ある時代とは、一九一六年、レマルク自身が師範学校在学中に出征した第一次世界大戦の期間を指す。主人公は、作者の分身である十九歳の志望兵、パウル・ボイメルである。七名の級友と共に入営して十週間の軍事教練を受けて、曾ての十年間の学校教育よりも決定的に人生観を変えられてしまう。へ僕らが此処で習った事は四巻のショウペンハウエルよりもよく光らした

釘一個の方が大事だといふ事々に、初めは驚き、次に憤慨！ 最後には、精神というものは、決定的なものではないと諦める。

兵營で重要なものは、精神よりも、靴刷毛であり、思想ではなく組織であり、自由ではなく訓練であった。

そして、軍隊における階級性の権力構造が、プラトンからゲエテに至る一切の文化の力を集めたよりも強烈であることを体感し、祖国の観念が軍隊では人格放棄を意味することに衝撃を覚える。

へ砲弾と毒瓦斯とタンクの小艦隊が……踏み潰し、噛み破り、殺し尽すのである。疫病と悪性感冒とチフスが……締め殺し焼き殺し、殺し尽くすのである」

へ一切の紙に書かれた事、行われた事、考えられた事は、すべて無意味だ。これだけの血の流れが迸り、幾万の人間の為に苦悩の牢獄が存在する事を、過去、千年の文化と雖も遂に之を防ぐ事が出来なかつたとすれば、この世のすべては嘘であり無価値であると云わなければならない——

死が日常性である戦争の不条理を告発し、人類文化の無力性に絶望的な断罪を加えるのである。人を殺す事が生涯の最初の職務であり、生活から知り得た事は、死ということに限られた彼等は、未来に一切の希望を持ち得ない。

「何を措いても、先ず生きたいのだ」と告白する彼等の塹壕の前で、ある日、一匹の蝶が戯れていた。

見渡す限り、一本の樹も花もない戦場で、蝶は、ある骸骨の齒の上に止まって休んでいる！

鼠は死骸の多い前線に移動して行った。

勿論、何のためであるのか？

それは脂肥りになった鼠を見て、兵士たちには分かっている。首を吹き飛ばされて、なお前進する兵士たち！

恐怖に発狂する新兵！

かかる悲劇的な戦争の根本原因を彼等は解明しようとする。だが、

「戦争で得をする奴等あるに違えねえな」

という以上の答えはでてこない。

「僕はまだ若い。二十歳の青年だ。けれどもこの人生から知り得たものは、絶望と死と不安と深淵の如き苦しみと、全く無意味なる浅薄粗笨とが結びついたものにと過ぎない。国民が互いに向き合はされ、逐ひ立てられ、何事も云はず、何事も知らず、愚鈍で、柔順で、罪なくして殺し合ふのを、僕は見てきた。この世の中の最も利巧な頭が武器と言葉とを発見し、戦争といふものを愈る巧妙に、愈る長く継続させやうと

するのを、僕は見てきた。――」

(秦豊吉記)

だが、やがて七名の級友も死に、主人公も停戦直前に無意味な戦死を遂げる。

「その日は全戦線に涉って、極めて穏やかで静かで、司令部報告は『西部戦線異状なし——報告すべき件なし』といふ文句に尽きある位であった」

と小説は結末を迎える。

主人公の戦争体験の諸相が、主人公自身の冷静な主知的認識で、即物的に表現され、氷の焰のような新しい客観性の世界の構築に成功している。何よりも動的視点からの事実と行為を巡る「報告」(Bericht)と、「通知」(Mitteilung)というスタイルの表現効果が、この小説のテンションを引き締め、新即物主義の典型的作品として、二十世紀文学史に古典的位置を誇っている。因にナチス時代には、反戦思想小説として禁書になったことも記憶されねばならぬ。

当時、火野葦平の『麦と兵隊』(徐州会戦従軍日記、昭和十三年九月 改造社)は、『土と兵隊』(杭州灣敵前上陸記、昭和十三年十一月 改造社)、『花と兵隊』(杭州警備駐留記、昭和十四年八月 改造社)と共に聖戦三部作として、朝日新聞文化賞を

受賞した。聖戦文学の最高峰と推奨され、作者を国民的ヒーローに祭り上げた、百万部を越える超ベストセラー小説である。

火野葦平自身、「ノイエ・ザハリツヒカイト」というキーワードは、知らなかった。だが、文学的実体として、新即物主義の思想と方法を肉化していた。いわば、ノイエ・ザハリツヒカイトの日本的形態である。

これらの作品には、『西部戦線異状なし』からの余響 (Eoho) や、憶起 (Reminiscence) や、反作用的影響 (Counter influence) を受けている。

最初に火野葦平の、当時の支那や戦争に対するウル・イメージ、ノイエ・ザハリツヒカイト以前のノイエ・ザハリツヒカイトを測定する素材として注目される、散文詩『濁流』を紹介しよう。

昭和十年一月発行の『とらんしつと』十八号に、火野葦助のペンネームで発表された。

1 黄浦江のの突岬を越えて数千の鷗軍は黯黒の濁流を蹴つて疾走する一隻の駆逐艦を追跡した。

(2章略)

3 艦艙の鉄扉を守る歩哨のの困惑——國の意欲が衝突する。進軍。銃火。砲撃。炸裂する戦線。毒瓦斯。戦車。

白兵戦。連続する殺戮！次々に戦乱を構成する部分の清算。駆逐艦がそれを棄却する。歩哨は戦央の偉大な秘密を守る。——だが蠢いてゐる！静謐なる喧噪。歩哨は

耳を澄ます。銃剣を擬し、発汗に濡れ、彼は無数の(アキ)を掻きわけてゆく。カンテラの薄暗い光。鬱積する臭気、漂ふ鬼気。彼はその表情の中に永劫の生命の觀念を理解する。しかし、刹那。冷酷なる鋼鉄の剣は柔軟なる石灰の肋骨をへし折る。

4 美しき歴史の間道を縫ふて狡猾なる黒き駆逐艦は星辰なき黯黒の揚子江の河口を盜賊のごとく抜け出た。艦艙の鉄扉を守る歩哨の考察。

(5、6章 省略)

この詩の主題は、帝国主義的植民地獲得競争に狂奔する日本の軍国主義の批判で、昭和七年、上海事変の渦中で、玉井組の沖仲仕と共に上海に派遣され、石炭荷降ろしの任務を果し、帰国後、赤化分子の疑いで若松署に留置された火野葦平の転向体験を貫くプシコ・イデオロギーが反映している。(『魔の河』『群像』昭和三十二年九月)、上海体験から近く、昭和十三年九月、改造社より刊行した、『麦と兵隊』の方法叙説と目すべき「前書」

で、執筆の動機を、

〈戦争について語るべき真実の言葉を見出すことは一生の仕事とすべき価値のあることだと信じ——中略——職場の中に置かれている一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも、又、何か役に立つことがあるのではないかとも考え、取りあへず、ありのまま書き止めて置く〉と述べ、

〈面白くもなく、凡庸の言葉を以て、列ね、地味で平板で、退屈な従軍日記〉であると、自己認識している。だが、一方、「葦平帰還座談会」(火野、尾崎士郎、林芙美子、杉山平助、『改造』昭和十四年十二月)では、

〈向ふことは書けない話ばかりで、どうも、突っ込んだ話をされると軍の関係にをりましたので、人の知らぬこともよく知ってをることがあるし、本当に困ることが多いのです〉と、制約された執筆事情を告白している。

この作品には、『西部戦線異状なし』のように、戦争の日常性のなかで、睡眠と食欲と性欲に苦しむ兵士のフラストレーション状況や、戦争批判、何を措いても、先ず必死に生き残りたいという兵士の根源的願望は、一切描かれていない。歩兵伍長、玉井勝則は、

〈私は弾丸の為にこの支那の土の中に骨を埋むる日が来た時には、何よりも愛する祖国のことを考へ、愛する祖国の万歳を声が続く限り絶叫して死にたいと思った〉と記すのである。

徐州會戦の従軍日記を基本的構成としている、『麦と兵隊』には、戦争の恐怖や、人間性の尊厳や誇り、内面の自由さえ喪失することによって成立する軍隊生活の日常性の秩序の実態を客観的に報告し、通知することは許容されていない。

本来、人間性の実存的危機を巡る破壊の証言と記録であるべき『麦と兵隊』の戦争は、常に聖戦であり、天皇陛下の赤子としての兵隊の生態であった。だが、あるがままの戦争を、あるがままの状態で知りたい、と願望する戦時下の国民にとつては、日記形式のザハリツヒな記録性が、下から見た、内側を描いた戦争それ自身の詩と真実として愛読されて、新即物主義の文学作品としての表現効果を発動していたのである。

### (III) KRIEG S 衝撃

二十世紀のアバンギャルド運動で〈戦争〉を文学の主題として積極的に意味づけたのは、F・Tマリネットの未来派である。

一九〇九年二月二十日、パリのフィガロ紙の一面に『Manifeste du Futurisme』を發表。その九条には、

— Nous voulons glorifier la guerre-seule hygiene du monde-la militarisme, le patriotisme, le geste destructeur des anarchists, les belles qui tuent et le mepris de la Femme —

(我等は戦争を賛美しよう——この世界の唯一の健康法を、軍国主義、愛国主義、無政府主義者の破壊のジェスチア、人間を殺戮する美しい思想と女どもの侮蔑を)

と主張している。

だが、本格的な戦争文学を創造するまでには至らず、オーストリアやトルコに対する戦争に参加し、ついには、B・ムツソリイニと提携するなど、ファッシズムに急傾斜していった。

櫻井忠温の『肉弾』や、水野廣徳の『此一戦』に代表される戦争文学に対する固定観念を一拳に変質せしめたのは、表現主義文学の金字塔である、R・ゲエリング(一八八七—一九三六)の戯曲、『海戦』(Seeschacht 一九一七)の衝撃である。

先駆芸術叢書(金星堂)の第一巻として、大正十三年五月、

伊藤武雄によって訳刊され、同テキストによる築地小劇場の第一回公演(大正十三年六月 十四—十八)は、吉田謙吉の舞台装置、衣装。和田精の舞台効果、配光。土方興志の演習によって、満都の芸術青年を熱狂させ、主題の積極性として、戦争の意味を鋭く喚起させた。

一九二〇年代後期から三十年代にかけて到来した、ノイエ・ザハリヒカイトの季節は、LENN(一八八五—一九七九)の『戦争』(KRIEG (一九七〇))を始め、ドイツやフランスを中心に多くの『戦争文学』(Kriegsdichtung)を創造した。

昭和五年十二月十八日、世界社より訳刊したルートヴィヒ・レン著の佐々木能理男訳『戦争』は、正しく、戦争——それは我々の両親である——La guerre—ce sont nos parents。—E・グレーザーの世代の文学的記念碑であり、日本の知識人は、この邦訳を媒介として、本格的に新即物主義の理論と作品を知ったのである。

訳者は、一九三〇年十二月の日付で本格的な「戦争」論を執筆。先ず、レンの『戦争』とルマルクの『西部戦線異状なし』が、新即物主義の代表的作品であることを表明している。

この作品が、新即物主義に缺くべからざる表現形式としての報告の形式をとってある点を強調。『戦争』は、狭い主観的体験

の報告ではない。その直接的な、本源的な、読者自身の体験を通して、その報告事実に対する批判を、読者自身から導き出すことに努力したという。レンにあつては特に、用語の選択以上に、語と語の配列、文と文との構成に重大な意味が齎される。

配列、構成は、ひとりレンのみが、これに対して関心をもつところの偶然的な要素ではなく、新即物主義の表現形式の決定的な要素なのである。この点において、新即物主義の「報告形式」は、映画のモンタージュと、その根源に於いて同じものなのであると説明する。

文学が芸術となり得るのは、語と語の配列——構成である。ここで注目すべきは、モンタージュ論とノイエ・ザハリヒカイト論の主張を同一視、観客(読者)をして、事実(現象)を体験せしめ、更にその体験に真実性を与えることの重要性を重視していることである。併し、現実の体験そのものが新即物主義の目的ではなく、事実の体験、現実性を伴った印象は、更に作者の意図する一定の方向に導かれなければならない。その目的は、作者の全人格であり、世界観であるという。レンは、『戦争』に於いて、一言も、アジテーションを行わない。

「作品は、決して政治的であつてはならない。だが、假令、政治的でないやうにと心懸けても、作品は政治的にならざる

を得ない」

新即物主義において作者は饒舌であることを止める。読者を消極的な、受動的な聴衆としての立場から引き上げて、積極的な、能動的な体験者にした。これによって作品の印象は無限に拡大され、強化された。新即物主義は、文学的表現の最も強力な形式であり、最も合目的な形式である、と解釈している。

コンミニストであつたレンは、擱筆後、スイスに亡命し、自己の体験を物語る『スペイン戦争』(一九五五)を残している。

#### (四) Turn gedichte の波動

昭和期を代表する、村野四郎の『體操詩集』(昭和十四年十二月 アホイ書房)は、ヨアンヒム・リングデルナッツ(一八八三—一九三四)から、詩集の題名『Turn gedichte』を借用し、日本の新即物主義の代表的詩人として有名である。

秋

僕はけふ

死んだ彼と一緒に歩いた

木犀やコスモスの堵の向ふに 青い空のある道を

僕は花をとって彼の釦の穴にさしてやらうとした、

すると、彼は痩せた胸骨を固くして

あらぬ方を見ていた。

遠くに流れていた雲

涯なく深い青春

彼の目を捉へてゐたものは何だっただらう。

道には枯れた蔓草が乱れていた

鶏があわてて逃げた

彼の冷たい影の中で虫がいない——

言はうとして言へなかつた彼のたくさんの言葉

きかうとしてきけなかつた僕のたくさんの言葉

それから悲哀の中でさわいでいた よわよわしい鶉のこゑ

この詩の初出誌は、実は昭和四年十一月発行の『旗魚』(四号)

である。「秋の日」と改題され、敗戦前夜の昭和十九年三月、第四詩集『珊瑚の鞭』に収載され、戦後も種々の詩集に転載され

ている。戦争体験を媒介に、実存主義的風土に傾斜していく精神状況を反映した、村野四郎の新即物主義の作品の典型である。と、一般に評価されてきた。事実は、新即物主義前夜の、村野四郎が、「新しい技巧主義に就いて」(『旗魚』四号)の詩論を反映した作品なのである。

ともあれ、リングルナッツは、戦争詩や愛国詩の隆盛した、昭和十六年三月二十五日、直接、交流のあった板倉鞆音訳で、『運河の岸邊』(第一書房)が刊行され、反時代的な詩風にも拘わらず、ベストセラーになったのである。ここには、「真田蟲」を紹介しておこう。

真田蟲の容態が非常に悪かった

彼はなんだかしじゅうお臀が痒ゆかった

そこで彼のお腹を切開して

シュミット博士が診断を下した所によれば

この蟲には蟲がわいてをり

その蟲にまた蟲がわいてゐる——

(五) ERNTE ʘ KASTANIEN 6 導入

アカデミズムにおけるノイエ・ザハリヒカイトの本格的研究は、昭和五年七月一日に刊行された、東京帝國大学独逸文学研究會編輯のエルンテ第四号の NEUFE SACHALICHKEIT 研究号によつて告知された。

編輯後記において、

へ今や世界文壇の耳目を集中せんとしているノイエ・ザハリヒカイト文学の研究号になつた。ノイエ・ザハリヒカイトが未だ諸説紛々の渦中にあるとは言へ、その根據の深淵さとその領域の廣汎さとは十分に魅惑的なものも多望な未来に感じせしめる。日本文壇がプロ派對藝術派等の猫額の論争に没頭している時、この新文学の出現は、まさしく銀翼萬里、初夏の碧空に浮ぶ巨船ツェッペリン號の如き清涼剂的魅力を投ずる事と思ふ

と自負している。だが、巻頭の「(一)ノイエ・ザハリヒカイト思潮の文学史的展開」(武田忠哉)を始め、新即物主義の訳語に対する言及は全く見られない。武田は、カール・ハンス・ビュナの「表現派文学の遺産」に同意し、さらにA・パウラーの「ノイエ・ザハリヒカイトは、今日では、不明瞭な、矛盾の多

い、一つの流行語である」と述べて、(一)即時代的ザハリヒカイト文学(二)没時代的ザハリヒカイト文学を紹介。結論的に

へノイエ・ザハリヒカイトは、假に、それを文学だけの範囲に限るならば、大都会に生育した自然主義と表現主義のジンテーゼであり、現実生活の客観・把握・批判・要約・報告を目的とする、新しい一つの思潮である」と規定している。

次いで米原讓がキウンター・ミラーの「文学に於けるノイエ・ザハリヒカイト」を翻訳。ノイエ・ザハリヒカイトの理念や方法の現代的独自性や史的必然性を多角的に考察しているが、結局、

へ若し今日、吾々が一般的に文学を要求するとすれば、それこそは、ノイエ・ザハリヒカイトの文学である」と結論し、トトロジカルな説明に終始している。

他の作品では、ベルト・ブレヒトのラジオドラマ、「リンドバーク」を吉田六郎が訳載し、レオン・ハルト・フランク作の『母二人』を神波比良夫が訳載。ラジオ・ドラマ『クラツミン』號『イタリア』号を救ふ(フリードリッヒ。ヴォルフ原作)を、小島尚が訳載。他にマリア・ルイゼ・カイスマンの「無名の人」等、「独逸現代抒情評選」を竹重徳隣、吉田六郎が訳載して注目

されている。

一方、昭和十一年二月一日、京大独逸文学研究会より、『カス  
タニエン』第一冊が創刊され、板倉鞆音が、新即物主義の詩人  
「エーリヒ・ケストナア抄」を訳している。第四冊は、昭和八年  
十二月一日に発行され、和田洋一が「現代独逸文学瞥見」を發  
表、特にギンダーマンの『Das literarische Antlitz der Geger-  
awarciasa』を紹介。即時代的と没時代的ノイエ・ザハリヒカ  
イトに言及、

〈没時代的ザハリヒカイト文学などという愚にもつかない  
用語を吾々はきっぱりと捨てざるべきである〉  
と提言して驚かせた。

昭和九年二月に刊行の第五冊では、吉田次郎の、「ルウトウイ  
ヒ・レン」論が巻頭を飾り、レンの「戦争」が、即物性・報告  
性・悲傷性などの点で、一つの頂点に位する作品であるという、  
文学的体験を冷静に自己分析している。そして、レンが、独逸  
のプロレタリア作家の旗手であると言っても言い過ぎではない  
と評価しているのである。

同号には、板倉鞆音の「リングエルナッツのことなど」も発表  
され、当時のリングエルナッツの受容の様相が点描されている。  
昭和九年四月、刊行の第六冊には、持続的に後に、訳詩集『運

河の岸邊』に集成された、『リングエルナッツ抄』が板倉鞆音によつ  
て訳載されている。昭和九年十月刊行の第八冊で、ノイエ・ザ  
ハリヒカイトの受容は終わりを告げ、圧倒的なトオマス・マン  
の季節が始まる。「批評家トオマス・マン」吉田次郎。小説「混  
乱と幼児の悩み」板倉鞆音訳。「トオマスマンの近作ヨセフとそ  
の兄弟」保中敬三訳。「詩人・思想家トオマスマン」、和田洋一、  
「マン年表及び日本の文献」杉山二十一等が内容である。

#### (六) 『新即物性文学』誌と『ノイエ・ザハリヒカイト』

##### 誌の光と闇

昭和六年十一月、『新即物性文学』第一号が編輯兼発行人より、  
新即物性文学社より発行された。まさに、今では幻の詩誌で、  
定価は二十銭である。一号で無限休刊になった。「事物の構造学」  
——ノイエ・ザハリヒカイトの形式——小林武七のエッセイが  
巻頭論文、「新即物性文学の発生と過程」堀井實。「事物の理想  
化」(ハインツ・キンターマン著) 田南親訳。「新即物文学の断  
定」(ヨーゼフ・ロート著)、谷藤重吉訳。小説「失はれた動機」  
ヘルマン・ケステン著、大橋武彦訳。その他、エーリヒ・ケス  
トネル「アルプスから」笹沢美明訳。ヨーアヒム・リングエルナツ

ツ「同乗婦人のプラシユート飛び」村野四郎訳。「年齢」(詩)  
 村野四郎。「ノルランド水上飛行」(詩)小林武七。「郵便」(詩)  
 笹川美明。「日米対抗水泳」村野四郎。「ニルス・ブック體操」  
 (詩)小林武七が内容である。

詩誌名のみが伝聞され、その実体は伝説化されていたが、確かに存在していたのである。ノイエ・ザハリヒカイトの国際的波動を測定するうえで、貴重な文献証拠である。

武田忠哉は、『ノイエ・ザハリヒカイト文学論』(昭和六年八月二十日 建設社)で、例えば、荒地派の旗手、鮎川信夫の当時の日記にも証明されているごとく、当時の文学青年たちのカリスマ的存在であった。「ノイエ・ザハリヒカイトの永遠性」や、「ゲートの世界文学の理念」(下)を発表。シュトリッヒの、「ドイツ文学の本性と精神」、バープの『エリーザベット・ベルクナー』を訳載。昭和十一年五月十五日、発行の第三輯にはシュトリッヒの「文学と文明」(上)の他、「ノイエ・ザハリヒカイト小説の静力学」、「ゲートとトルストイ」、「ルール」を発表。

昭和十一年十一月十五日、発行の第四輯には、クリステイ・アーゼンの、「ノイエ・ザハリヒカイト老現学(一)」。シュトリッヒの「文学と文明」(下)を訳載。他に、「エリーザベット・ベルクナー」や、「ブック・リヴュー」を発表している。昭和十二

年五月二十日、発行の第五輯には、クリステイ・アーゼンの「ノイエ・ザハリヒカイト老現学(二)」や、バープの「エミール・ヤニングス」を訳載。他に「ゲートの市民性」、「映画——ノイエ・ザハリヒカイト」を発表している。

昭和十三年五月十日発行の第六輯には、クリステイ・アーゼンの「ノイエ・ザハリヒカイト考現学」(三)や、クノーテの「燈管とカムフラージュ」(上)を訳載。「飛行文学の展望」や、「レニー・リーフェンスタイル」を発表している。

昭和十四年二月一日、発行の第七輯には、クノーテの、「燈管とカムフラージュ」(中)を訳載。「勝たねばならない」、「航研機——オリンピック」、「豊田四郎——片山明彦」等の時事評論。「ノイエ・ザハリヒカイトの動向」で、

「現下の日本の局面において、われわれはノイエ・ザハリヒカイトを新しく文明史の基調として確認し、その実現の為に離陸しなければならないのだ」と、独自の戦争哲学観！を提言している。

昭和十五年十一月一日、発行のノイエ・ザハリヒカイト学会の機関紙の特別号として刊行された武田忠哉著、『國防國家』は、大政翼賛会総裁、近衛文麿公に捧げられ、〈興和的知性〉が主張され、朝日新聞学芸欄の自由主義的色彩を告発し、軍用機献金

を提言し、〈学校防空〉の必要性を強調するなど、ナチズムのイデオログとして、狂熱的な戦争謳歌のアジテーションを展開するなど、逆転向? を果たした。

ノイエ・ザハリヒカイトを巡る当時のモダニストの問題関心を反映した小説として、新興芸術派の旗手、久野豊彦が、昭和七年三月、『文科』(第四輯)に発表したシニシズムと暗いユーモアを漂わせた風刺小説、「新即物主義」が異色である。また、土田杏村は、『文学理論』(昭和七年七月 第一書房)において「新即物文学」の新時代的意義を述べ、フィッシアやケインズ、カッセル等の新しい経済学の成立や、Mハイデッガアの存在論の哲学を背景として考察するとき、ノイエ・ザハリヒカイトの本質が最もよく理解されると強調している。

発動国であるドイツでは、ナチスの民族至上主義の文学として変貌を遂げていったが、日本でも、昭和十年代、戦争文学を始め、記録文学、伝記文学の方法的支柱として新即物主義の報告形式や事物の記録性、文明批評性は、明らかに密輸入されていたのである。

(七) 参考文献

—昭和前期—

『現代の独逸文学』F・ヘルト著 大野俊一訳 昭和四年七月

厚生閣書店

『西部戦線異状なし』E・M・ルマルク著 秦豊吉訳 昭和四年

十月 中央公論社

『最近独逸文学における新即物主義』茅野蕭々 昭和四年十月十

五日・十六・十七日 朝日新聞

『現代ドイツ詩壇鳥瞰』笹沢美明 『世界新興詩研究』昭和四

年十二月 金星堂

『新即物主義』成瀬無極 昭和五年一月改造

『現代ドイツ文学とノイエ・ザハリヒカイト』武田忠哉 昭和五

年二月二十五・二十六日 朝日新聞

『ノイエ・ザハリヒカイト』阪本越郎 昭和五年四月 前衛 創

刊号

『ノイエ・ザハリヒカイト文学』笹沢美明 昭和五年六月 『詩

と詩論』第八冊

『ノイエ・ザハリヒカイト研究号』エルンテ第四号 昭和五年七

月

小説「ベルリン・アレキサンダア広場」A・デブリン作 島上

千一訳 昭和五年七月 新科学的文芸 創刊号

「ノイエ・ザツハリヒカイトに就いて」白旗 信 昭和五年七

月 独逸文学研究四輯

「新即物性文学と日本文学」茅野蕭々 昭和五年九月 中央公

論

「ノイエ・ザハリヒカイトの都会性 上」武田忠哉 昭和五年九

月 世界文学評論 創刊号

小説『戦争』(KRIEG) L・レン著 佐々木能理男訳 昭和五年

十二月 世界社

「スイスのノイエ・ザハリヒカイト文学」武田忠哉 昭和六年五

月 作品

「ノイエ・ザハリヒカイト文学論」武田忠哉 昭和六年八月 建

設社

「新即物性文学 第一号」昭和六年十一月 新即物性文学社

小説「新即物主義？」久野豊彦 昭和七年三月 文科第四輯

「ノイエ・ザハリヒカイトの美学」中井正一 昭和七年五月

美・批評

『新独逸文学』阪本越郎 昭和八年五月 金星堂

「現代独逸文学瞥見」和田洋一 昭和八年十二月 カスタニエ

ン第四輯

「文学史概説 現代」成瀬渚 昭和八年五月岩波講座 世界文

学

『現代独逸文学の展望』新関良三 昭和九年二月第一書房

『独逸文学の知識』山岸光宣 昭和九年五月 非凡閣

「新即物主義の文学」村上清延 昭和十一年十二月 世界文芸

大辞典 第四卷

「ノイエ・ザハリヒカイトの傾向と意義」笹沢美明 昭和十二年

八月 日本詩壇

「新即物主義と超現実主義」原 一郎 昭和十二年九月 詩作

「ノイエ・ザハリヒカイトの擁護」村野四郎 昭和十二年十月

新領土

「現代詩の性格ノイエ・ザハリヒカイト的傾向に就いて」(座談

会) 村野四郎・笹沢美明・武田忠哉・安藤一郎・原一郎・田

木繁等 昭和十二年十月 日本詩壇

『體操詩集』村野四郎 昭和十四年十二月 アオイ書房

『運河の岸边』リンゲルナッツ著 板倉軻音訳 昭和十六年三

月 第一書房

☆『新即物性文学』第一号 昭和六年十一月 編輯兼発行人

小林武七 発行所 新即物性文学社

「事物の構造学——ノイエ・ザハリツヒカイトの形式」(評論)

小林武七

「新即物性文学の発生と過程」(紹介) 堀井実

「事物の理想化」(翻訳) ハイイツ・キンダーマン 函南親訳

「新即物性文学の断定」(翻訳) ヨーゼフ・ロート 谷藤重吉

訳

「アルプスから」「尻に敷かれた英雄」「少し早熟の子供」(訳

詩) E・ケストネル 笹沢美明訳

「同乗婦人のパラシュウト飛び」(訳詩) リンゲルナッツ 村

野四郎訳

「年令」(詩) 「日米対抗水泳」(詩) 村野四郎

「ノルランド水上飛行」(詩) 「ニルス・ブック体操」(詩) 小

林武彦

「郵便」(詩) 笹沢美明 「失われた動機」(小説) ヘルマン・ケ

ステン 大橋武彦訳

☆『ノイエ・ザハリヒカイト』編輯発行人 武田忠哉 発行所

ノイエ・ザハリヒカイト学会

第一輯(昭和十年九月) 第二輯(昭和十一年一月) 第三輯

(昭和十一年五月) 第四輯(昭和十一年十一月) 第五輯

(昭和十二年五月) 第六輯(昭和十三年五月) 第七輯(昭

和十四年二月)

『国防国家』武田忠哉 昭和十五年十一月ノイエ・ザハリヒカ

イト学会

付記

発動国のドイツでの発生事情については、千葉宣一執筆、「ノ  
イエ・ザハリヒカイト」『近代文学史用語事典』(至文堂 昭和  
45年9月刊)を参照されたし。

武田忠哉著

(第七篇)

国防国家

ノイエ・ザハリヒカイト学会